

第4回放送より地雷被害者の方にゲストDJとして出演していただく。地雷被害者の方々の抱える悩みや苦勞を、実際に被害に遭われた方の口から直接聞くことで、視聴者の意識をひきつける。



7・8月度バタンバンラジオ局ゲストDJ ボウ・チャムさんと由見裕也
ボウ・チャムさんは地雷撤去団体 MAG でスーパーバイザーとして働いている

第4回（バタンバン:6月30日, バンテアイミエンチャイ6月24日）

バタンバンの第4回目の放送は6月23日（土）の予定であったが、予期せぬ停電のため放送中止。カンボジアならではのハプニングである。したがって第4回の放送は翌週に持ち越された。今回の放送よりバタンバン、バンテアイミエンチャイの各局それぞれで地雷被害者にゲストDJとして出演していただく。

朗読された手紙より1通

タマイ村に住む大切な私の家族と友達のみんな、最近どうですか？ラ君、ターン君、ワーン君、ホー君、みんな元気かな？カンボジア中の障害者の皆さん、バタンバンのFM103.25で今「VOICE OF HEART」を聴いている皆さん、ご機嫌いかがですか？僕は人生がんばっています。最後に、皆さんの幸福とご健勝をお祈りします。

バンテアイミエンチャイ州 ヴァーン・ポル

朗読された詩より1篇

題名：マイストーリー 作者：バタンバン州 ノップ・ンゲ

地雷を踏んでから
無くした足のせいで
惨めな人生を歩んできた
孤独、苦難、腐心
なんでこんなことに
どうして俺なんだ
恥ずかしくて外を歩けない
もうこんな世界にはうんざりだ
俺の心臓は破裂寸前
仕事だってできやしない
だから家から一歩も出なかった

おお、俺の無くなった足よ
お前には本当にかっかりだよ
俺の人生は車椅子人生
こいつなしじゃ生きていけない
いやまてよ、こいつがあるから生きていける
今、こいつの上でバイク修理を学んでいる
もう命を絶とうなんて考えない
できることはなんでもしてやる
そして新しい人生を切り開く
俺には足は無いけれど
希望に満ちた心は持てる

インタビュー（生インタビュー）

7・8月度バタンバン放送局ゲストDJ ポウ・チャムさん（51歳，地雷被害者）

私の名前はポウ・チャムで、歳は51歳です。1990年6月19日、敵軍と戦っているときに地雷を踏んでしまいました。そして右足を失いました。事故後は、貧しかった家庭がさらに貧しくなりました。当時、義足を作ってくれるような



NGOは存在せず、仕事を見つけることができなかったのです。事故後も軍から少しばかり給料が出ていましたので、それで何とかやっていきました。1994年に、NGOの助けで義足を手に入れることができ、識字や英語、タイピングのスキルを習得しました。それからはそのNGOのガードマンとして月30\$で働きはじめました。そして1996年、イギリスの地雷撤去団体MAGが地雷被害者を地雷撤去員として雇っているということを知り、私もそれに応募しました。その後地雷撤去員として採用され、政府系地雷撤去団体のCMACで研修を受けた後、実際にMAGの地雷撤去員として地雷撤去を開始しました。現在はスーパーバイザーとして地雷原で地雷撤去員を取り仕切っています。地雷被害者の皆さん、どうか自分を信じてください。身体に障害はあっても心はそうではないはずです。私たちは強い心と信念さえ持てば、必ず自分を成長させ、家族を養うことができます。そして障害者でないリスナーの皆さん、障害者を差別するのはやめてください。代わりに励ましの言葉をかけてあげてください。

7月度バンテアイミエンチャイDJ イェン・ブンチョーンさん（34歳，地雷被害者）

わたしはイェン・ブンチョーンといいます。年は現在34歳で、妻と子どもが2人います。1995年に軍にいたときに地雷を踏み、右足を失いました。事故直後、タイの病院に輸送されましたが、12日入院してまたすぐにカンボジアに戻ってそれから軍病院に1ヶ月ほど入院しました。傷口がふさがったあとも、また軍に戻って働いてきました。しかし現在はもう辞めています。地雷被害にあった後、自分が障害者になったのだという現実を受け入れることができず、自殺を考えたりもしました。でも苦しんでいるのは自分だけではないのだと気づいたのです。世の中には地雷被害者がたくさんいます。私のように片足だけじゃなく、両足ともに失った人も多く見



ます。そんな人たちが一生懸命に生きています。今では、死のうなど馬鹿なことを考えていた以前の自分を恥ずかしくさえ感じています。私は今障害者職業訓練センターのCWARSでバイク修理を学んでいます。またその傍ら、バイクタクシーをやって収入を得ています。最後に私のような地雷被害者をはじめとする障害者の皆さん、障害のことは気にしたってしょうがないです。前を向いて一生懸命頑張りましょう。技術を身につけて仕事を見つけましょう。

第5回（バタンバン：7月7日，バンテアイミエンチャイ7月1日）

今回より、ゲストDJとして地雷被害者の方に出演していただく。インタビューコーナーの時間を今回は新DJの自己紹介コーナーにした。初めての仕事に両者ともに緊張していたが、地雷被害者の悩みを切実に語っていただいた。

朗読された手紙より1通

わたしは現在、地雷撤去団体MAGで地雷撤去員として働いている地雷被害者です。この手紙は1978年に離れ離れになってしまった私の愛すべき家族の情報を求めて書きます。私の名前はヒアン・フオトです。しかし以前の私の名前はフオン・ヒアンです。わたしは1978年以来1度も会っていない家族にすごく会いたいです。リーウ・ホウトお父さん、

ソアト兄さん、ボンプロン姉さん、リーウ爺ちゃん。みんな 1975 年にポル・ポト政権によってプノンペン空港の近くにばらばらに強制移住させられました。リスナーの皆さん、もし私の家族の情報を何かお持ちでしたら連絡お願いします。

コンポンチャム州 ヒアン・フオト

朗読された詩より 1 篇

題名：輝く障害者 作者：アン・メット バッターバン州

僕は地雷被害者
でもめげずに一生懸命働く
明日の飯にありつければいい
そんなことは考えない
人生を長い目で考える
そして自分を磨き続ける

障害者の皆さん
頑張ろう
障害を言い訳に人生を投げてはいけない
さあ、立ち上がろう
輝きある人生を手になろう
輝きある国を創ろう

インタビュー

EMERGENCY

■活動内容

EMERGENCY は地雷や不発弾、銃や交通事故等によって重い傷を負った患者を治療している、イタリアのNGOが運営する無料の救急病院です。その他にも、手術を必要とするようないかなる病人も受け入れています。地雷や不発弾等により手や足を失われた患者の方々には、傷口がふさがったあと、退院前にリハビリを受けてもらい、その後、義足や義手をつくるため、車椅子の提供を受けるために義足・義手・リハビリセンターのICRCへ行ってもらおうという流れになっています。退院した患者でも、もし何か問題があればいつでもEMERGENCYは受け入れます。もちろん全て無料です。また、EMERGENCYは手や足を失った障害者に働く機会を提供しています。ガードマンや洗濯スタッフや勝利係等がそれです。



■リスナーへのメッセージ

障害者のみなさん、私たちは身体的には皆さんをサポートできますが、心の傷に関しては難しいです。どうかこの番組を聴いて、少しでも前向きに生きてください。そして、皆さんのこれからの人生を左右するのは結局皆さんの気持ちです。どうかめげないで、困難に立ち向かっていきましょう。

第6回（バタンバン:7月14日, バンテアイミエンチャイ7月7日）

朗読された手紙より1通

バラングじいちゃん、コウムばあちゃんをはじめとするピッチチェンダ村のみんな、ご機嫌いかがですか？ラー、イエート、ティアーさん、みんな元気？私は今 EMERGENCY で入院して治療を受けています。ところで私の兄弟のナーン、あなた自身の健康に少しは気を使ってね。まずワインを控えなさい。そして夜出歩くのはやめなさい。お姉ちゃんあなたのことが本当に心配なのよ。バランさん、私の畑の世話をよろしく頼みます。最後に、皆さんがこれから先、健康で幸せに過ごせることを心からお祈りします。

バタンバン州 ジョン・テリー

朗読された詩より1篇

作者：バンテアイミエンチャイ州 ビヴォル

障害を持つ皆よ
私たちに命がある
磨くべき命がある
切磋琢磨しなければダメだ
どんな困難に襲われようと
我々は立ち上がり続けなければならない
なにか勉強に励もう
希望と幸せに満ちた未来への近道だから
あなた自身は障害ではない

へこたれるな
心に障害はないはずだ
体の障害だって
宇宙から見ればちっぽけなもんだ
精一杯に生きよう
動物だって一生懸命に生きている
勇気を持って困難に打ち克とう
技術を身につけ職を手に入れよう
光り輝く未来を実現するのだ

インタビュー

ソク・ソンさん（32 歳，地雷被害者）

1989 年 2 月、政府軍としてクメールルージュと戦っているときに地雷を踏み、右足を奪われました。タイの病院に運ばれ、治療を受けたあと、また軍に戻って働いておりました。現在は軍はやめ、CWARS で 1 年かけてテレビ修理を学んでいる最中です。TV 修理技術の習得はとても難しいと感じていますが、これは私の残りの人生をかけたチャンスだと思って一生懸命勉強しております。技術をきちんと覚え、自分で店を構えられるようになると思ううれしく感じます。私のような障害者の皆さん、私たちは身体障害者ではありますが、CWARS のような職業訓練校で職業技術を身につけ自立することは可能です。わたしも以前はいつも誰かの助けを待っていただけでした。でも今では自分自身で人生を支えています。どうか皆さんもご自分の人生をご自分で切り開かれてください。



セイン・ソーンさん（41 歳，地雷被害者）

私の出身はコンポントム州です。忘れもしない 1991 年 2 月 12 日、いつものように木を切りに森に入っていたときに地雷被害にあいました。右足を吹き飛ばされ、コンポントム州の大きな病院へ収容されました。治療が完了したあとはある NGO の助けによって、義足を作ってもらいました。同時に 1 年間、電気技術の訓練も受けさせてもらいました。そういうわけで今では電気技術者として働いています。はじめは電気技術や理論を覚えるのが本当に大変でした。でも難しくても、人生のために頑張ろうと心に決め、苦勞しながらもなんとか技術を習得しました。地雷の被害にあったものの、今では、仕事も見つけ、家族とも幸せにやっています。でも事故当時、私も足を失ったショックで生きる希望を失ってしまいました。でも同じ気持ちを抱えているのは私だけじゃなかったのです。足を失っても仕事を見つけた人もいるのを知り、自分も努力すれば幸せな人生が送れるはずだ、と思い始めました。そして今に至ります。最後に、地雷被害者の皆さん、人生を投げ出すのはトライしてみてからにしてください。一生懸命学び、仕事を探そうと努力してみてからにしてください。障害者だってやればできるのです。やってください。

